

障害児教育が拓いてきた価値

―実践から考える―

兵庫・元特別支援学校教員
原田文孝

わかるいっこの価値

私は、集中治療室に入院している小学部4年生の石橋君の訪問教育に行っていました。石橋君は、気管切開して人工呼吸器をつけています。からだや手のひらに触れる「ふれあい遊び」は大好きなのですが、顔に触れられるのが、とっても嫌いでした。顔に触れようとすると、顔を背けようとしません。動物の親子が「ちゅ」をする絵本を読んで、「おててにちゅ」と歌いながら石橋君の手のひらに「ちゅ」をすると、大喜びしました。あんまり喜ぶので、石橋君のほほに「ちゅ」をしてみました。きつと嫌がるだろうと思ったのですが、ついやってしまうのが教師心です。「ほっぺにちゅ」と歌いながら、ほほに「ちゅ」をすると、石橋君は笑ったのです。「えー！ どうして笑うの？」と私と参観されていたお母さんは驚きました。なぜ石橋君は笑ったのかをお母

さんと話し合った結論は、「本当は触れてほしかったのだらう」ということでした。

石橋君は2歳のときに発病し、急激に進行したようです。気管内挿管や鼻からのチューブの挿入、口・鼻からの吸引などが怖くなったのでしょうか。石橋君は「触れてほしい（愛してほしい）けど、顔は怖いので触れてほしくない、でも触れてほしい」と悩んでいたのです。この「触れてほしいけど、触れられたくない」という石橋君の悩みと「ちゅ」という「ふれあい文化」が出会うことで、「触れてほしい」というねがいが高まり、怖さを乗り越えたのではないかと考えました。このことは、石橋君が「ふれあい文化」をわかったということ。そして、石橋君が「ふれあい文化」をわかつていることを、私たちはわかって大喜びしたのでした。このことを佐伯胖（『わかり方』の探求）の論に学びながら整理す

ると、石橋君は「ふれあい文化」をわかることで、文化に参加しただけではなく、私たち大人の喜びという新たな文化を生み出したのです。わかるということの価値を考えさせられた出来事でした。

私は、このときに2つのことを学びました。1つは、人間とはなんと複雑で、奥深い存在であるかということです。2つ目は、石橋君を4年間担任していて、ほとんどわかったつもりになっていましたが、全然わかっていなかったということでした。わかったつもりでいること、それ以上わかるうとしないことの恐ろしさを学びました。田中昌人は、「映画『夜明け前の子どもたち』製作運動に学ぶ」（1967、12）の講演のなかで、「下出口君はいつもベッドに寝かされたままにいるというような仕方であつたのです」と述べています。私は、

この「ベッドに寝かされたままにいる」ことを「拘束」ととらえる見方に学んで、石橋君のことを不十分に理解し、その理解に基づくかわりという仕方では石橋君を「拘束」していたのではないかと考えました。その理解は、私自身も「拘束」



していたのです。私は、それを「理解拘束」と呼んでいます。石橋君は、「ふれあい文化」をわかることで、私の理解に基づくかわりによって拘束されていた自分と担任の私を解き放つていてくれたのです。

生活をどうつづけるか

施設や病院で生活している子どもたちだけでなく、家庭で生活している子どもたちも、忙しさのなかで大人との応答的人間関係の希薄な生活を余儀なくされています。生活体験は限られていても、例えば、毎日オムツを替えます。そのオムツを替えるということ、子どもたちはどれほど意識し、わかり、気持ちよく思っているのでしょうか。オムツを見せながら「オシッコ出たから、このオムツに替えようか？」と尋ね、応答を待ち、一緒に決めていく。「おしりきれいに拭きますよ」と言って、じっくり拭いていきながら、「気持ちいいね」と言って気持ちよさを意味づける。新しいオムツに替えながら「おしりを動かすよ」などの言葉かけをしていく。

このような濃密な応答的人間関係のなかで、子どもたちはオムツを替えることを意識し、替えたことをわかり、気持ちよくなったと感じるのです。しかし、子どもたちは、忙しい生活のなかで応答的人間関係が希薄になり、ねがいや悩みの表出・表現が抑制され、応答していく意欲も弱まり、あきらめの気持ちが強くなっています。私は、これを「関係拘束」と呼んでいます。

私は、こうした「関係拘束」された子どもたちの教育として